

編集後記

■今、第2号の校正を終えホツとしているところである。今春4人で立ち上げ、1万円づつ出資で始めた同人誌。やはり悩ましいのは財源不足である。お陰さまで小誌は好評で、創刊号100冊は品切れとなり、今号は150冊に増やした。財源をどうするか、4人で膝突合せ議論しても、なかなかいい案は浮かばない。「寄稿者に一律2000円お願いしてはどうか?」「いやいや寄稿者はプロの人もいれば、初めての人もいる一緒にはできない」。しからば、「原稿の枚数に応じて、5000円から500円お願いしてはどうか」。「まてまて、冊子はあくまで300円としてお願いしよう」。「じゃあ篤志家や賛同者に頼んで、出資金を基金として出してもらってはどうか」……とまあ、百家争鳴で結論がでない。この号が出るころには方向は決まっているかもしれない。どうかスタッフ4人存続のために出した結論なので、ご理解とご協力をお願いしたい。俗にいう3号誌に終わらせたくないのです。(林)

■今秋の上映会は、昨年が続いて東アジア映画を企画しようというこゝで進めた。私自身これまでにアジアの作品を数多く観ているわけでもなく、とまど

うことが多かった。

手にすることができる範囲でDVDを観たり、雑誌などから情報を探ったり、ある人から作品を紹介してもらった。アジア映画の歴史を少しづつ知り、その世界が日本にない豊かな魅力を持っていることを感じている。アジアは広く、国によって違ってきている背景が異なり、映画に表現されているところも巾広い。遅まきながらアジアのとは口に立ったのかと思つてるところです。今秋の上映会はみなさんの反響がより一層楽しみです。本誌第2号は若い方々より寄稿もあつて、巾ひろく面白さもアツプしたと自負しております。(中村)

■今号で目に留まるのでお分かりと思うが、挿画は笠野建司さんと後藤邦夫さんにお願した。また、パソコンの編集作業で壁にぶつかると、加藤泰久さん、石坂栄里さんに助けてもらった。この4人の暖かい応援に感謝したい。(林)

■昨年の6月にマジックデビューをした。芸名はMr.モリックである。キャリアは少ないが、子ども会、老人施設、BARなどに招かれる機会が増えてきた。ステージには魔物が潜んでいて、同じマジックをしても毎回、緊張感が走る。特に子どもは強い。演技のスタートと同時に「わかった!」仕掛け

が見えていなくても「見えた!」というのが決まり文句である。しかし、不思議な現象を見せると「えっ!」と大きな声で感動してくれるのも子どもである。この瞬間が最高に楽しい。しかし、マジックの「現象」を武器に優位に立ちたい訳ではない。昨年6月の記念すべきデビューステージでは、仕掛けテーブルから落ちてしまい客に見えてしまったが、客はわざと失敗したと笑ってくれた。デビュー早々に「マジック」と「笑い」を融合した独特のスタイルが生まれた。新ネタをシネマ游人編集委員会の休憩時間に披露することが、技術向上を目指すエネルギーになっていく。(森)

■第2号も、多彩な執筆陣のお陰で、なかなか読み応えのある面白い冊子に仕上がったと思います。それにしても、洋画を3本選ぶという難しい注文に、流石に通らしい選択の数々、感心しました。通俗的なものばかり選んだのは私一人、でした。そうこうしているうちに、11月3日の上映会がやってきます。映画は2本とも、レンタルビデオ屋には置いて無いので、この機会を逃すと、もう見られないかもしれません。是非お越しください。(堀川)